16　木下闇　川端玉章　一幅

絹本着色
明治四十年（一九〇七）
本紙八六・〇×一六一・五

明治四十年（一九〇七）に日本美術振興を目的とする官設展として、文部省美術展覧会が開催された。この時六十六歳であった玉章は、東京美術学校の教授として、そして東京側の円山派の代表としてこの展覧会の審査員を申しつけられた。ちなみに京都側の円山派としては竹内栖鳳、山元春挙がやはり審査員として参加した。本図はその第一回文展出品作であり、審査員出品のため受賞対象とはならなかったが、宮内省買上げとなった。

玉章がつけた画題「木下闇」とは、夏に枝葉が繁茂してできた木陰を意味する言葉で、夏の季語として用いられる。田園や奥山が青く染まっていることから盛夏を思わせるが、薄に赤い花穂がついているところにはすでに秋の気配が漂っている。葉の茂った樹木の下を、戯れながら歩を進める童子らと彼らに優しい視線を向ける母親が歩んでいる。ちなみに本図は、鎌倉にある玉章の別荘周辺の景色を題材にしたという（『日本美術』第百十一号、明治四十一年四月）。

明治二十年代には、円山派の写実性と洋画の表現技法を融合させることが玉章の一番の関心事であり、山水などはやや硬い描写となる傾向があったが、三十年代になるとそれはより調和のとれた自然な表現に落ち着いていく。さらに玉章は中国の藍瑛などの文人画の影響も受けながら、本図のような叙情的な画面をつくる境地へと至った。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 ―円山派の伝統と発展
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections